

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K00871

研究課題名(和文)健康を創出する生きいき食教育プログラム評価指標の開発

研究課題名(英文)Development of evaluation index for active food education program to create health

研究代表者

加藤 佳子(Kato, Yoshiko)

神戸大学・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：30435052

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：中学生以上を対象とした年齢横断的な調査により、行動変容をめざした食教育プログラムの標準化をはかるうえで有効な評価指標の開発を行い、その有用性について検討した。

その結果、健康な食生活を送る動機づけや自律支援アセスメント指標などを作成出来た。また健康生成要因であるストレスレジレンスやソーシャル・サポートを強化しwell-beingを高めることが健康な食生活を送ることに對する自律を促し、MetSの改善につながることも示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

食生活の改善をめざした健康支援は、主に生活習慣病の予防をめざした疾病生成論の立場から立ち取り組まれている。しかし行動変容を促すためには、健康生成論の立場に立ち、積極的に健康を創出しようとする人の強みに注目することが有益である。

本研究は、行動変容を促す健康生成要因を明らかにし、健康支援研究に学術的な革新をもたらした。本研究により作成した評価指標や見出された知見を活用することにより、自律性を尊重した健康支援の実現をはかり、食行動の変容につなげることが期待できる。

研究成果の概要(英文)：A cross-sectional survey was conducted among middle school students and above. We developed effective evaluation indices for the standardization of food education programs aimed at behavior change, and examined the usefulness. As results, we were able to develop a motivational index for healthy eating habits and an autonomous support assessment index. It was also suggested that enhancing stress-resistance and social support to increase well-being may promote autonomy for healthy eating habits and improve metabolic syndrome situation.

研究分野：健康心理学

キーワード：動機づけ 食教育 健康生成論 well-being メタボリックシンドローム ストレスレジリエンス ソーシャルサポート

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

食行動と健康との関連：不健康な食生活は、肥満やメタボリックシンドローム (MetS) などの身体的健康問題の原因となるとともに、精神的、社会的健康にも影響する。健康日本 21 では、栄養状態、食物摂取、食行動、食環境の目標を設定し健康増進に取り組んでいる。しかし、国民健康栄養調査によると成人の平均野菜類摂取量は 286.5g で、どの年代でも目標値の 350g に達していないなど取り組みの効果が十分に表れていないものもある。また、男性の 51.6%、女性の 17.1% が MetS や MetS 予備群であることが報告されている。

食教育プログラムの標準化と課題：食習慣改善に対する態度と MetS との関連について検討したところ食習慣改善に対する態度は、実際の食品群別摂取状況に影響し、MetS の予防に影響していることが示唆された。この様な背景から行動理論に基づいた食教育プログラムが開発され、その有効性が報告されている。しかし、その効果は十分に浸透していない。その理由として、食教育プログラムを実施する際、受講者、指導者とこれらを取り巻く環境の独自性が考慮されていないことが考えられる。つまり、指導者や受講者の特性と関係性、環境等は常に異なり流動的である。そのため、個別事例で効果的なプログラムであっても、実施困難であったり、十分な効果を得られない可能性がある。厚生労働省もこの点を指摘しながら、これまでの研究成果に基づき保健指導プログラムの標準化を試みているが、行動科学、教育学、栄養学等との連携によるさらなる研究成果を期待しており、標準化の精緻化をめざされている。以上のことから、適切な行動変容理論に基づいた食行動に注目した介入の強化が必要であり、国民一人ひとりの状況を考慮し国民が自律的に生きいきと積極的に健康を創出する実施可能な食教育プログラムの標準化が必要であると考えた。

健康を積極的に生成していくモデル：ここ 30 年の間に健康をとらえる概念は疾病生成モデルから健康生成モデルへと大きく進展しており、我が国においても健康生成要因の強化が推進されている。疾病生成モデルは、疾病生成要因を経つことにより、疾病の予防をめざしたモデルであり、健康生成モデルは、人は健康を生成する資源を持っており、この資源を活用し積極的に健康を獲得しようとするモデルである。

図 1 に示したように健康につながる食生活の関連要因として健康生成モデルの中核概念である首尾一貫感覚 (Sense of Coherence: SOC)、自律的な動機づけ、ソーシャル・サポート、子どもの頃の食環境などの健康生成資源を明らかにするとともに、健康な食生活を送る動機づけを測定する尺度の開発など、食教育プログラムの標準化に有効な評価指標の開発に着手してきた。

また、一次予防の進んでいるスウェーデンの取り組みを調査したところ、健康生成要因が提示され、これについてどのように取り組まれているかが健康教育プログラムの評価指標とされていた。つまり、人が積極的に健康を生成していくために必要な要件がプログラムに備わっているかを確認しながら、受講者、環境の特徴を踏まえ、指導者が自律性を尊重した食教育プログラムを開発することを促進する評価指標が必要である。

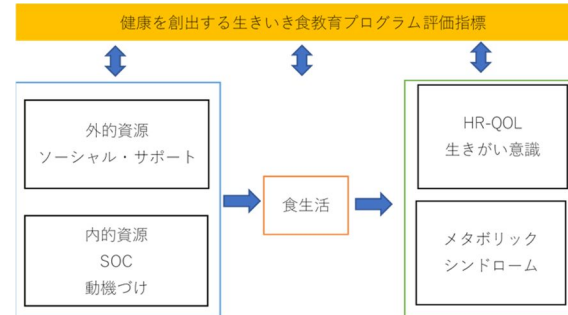


図 1 健康生成資源を活用した生きいき食教育プログラム評価指標モデル

2. 研究の目的

これまでの研究では、MetS が増加する壮年期以降の危険な生活習慣の出発点でもあり、食生活の乱れが危惧されている大学生を対象として検討を行ってきた。しかし、実際に MetS が深刻になるのは中年期以降である。その一方で、近年では子どもの MetS に対する警鐘もされており、効果的な食教育プログラムの標準化をめざすためには、子どもから成人を対象とした年齢横断調査を行い発達的な特徴を見出し、ライフステージに応じた詳細な食教育プログラム評価指標を開発する必要がある。

本研究では大学生を対象とした研究成果を踏まえ、子どもから成人を対象として健康生成要因を強化・支援する食教育プログラムの標準化をめざした評価指標を完成し、評価指標の有用性を確認することを目的とした。また、当初の目的に加え健康生成資源を活用した生きいき食教育プログラム評価指標モデルの精緻化を行った。

3. 研究の方法

(1) 質問紙調査

中学生、高校生、大学生を対象とした質問紙調査

調査の目的：健康生成要因を強化・支援する食教育プログラムの標準化をめざした評価指標の作成、健康生成資源を活用した生きいき食教育プログラム評価指標モデルの精緻化

調査対象

中学生 1 年生 120 名 (男子 59 名、女子 61 名)、2 年生 141 名 (男子 64 名、女子 77 名)、3 年生 190 名 (男子 88 名、女子 102 名)、高校生 1 年生 179 名 (男子 79 名、女子 100 名)、2 年生 151 名 (男子 76 名、女子 75 名)、3 年生 119 名 (男子 61 名、女子 58 名)、大学生 346 名 (男子 129

名, 女子 217 名) 合計 1246 名

調査内容

「健康的な食事」および「健康のための運動」についての行動変容ステージ, 主観的健康, 朝食の摂取状況, 起床時間と就寝時間, 朝型夜型, 健康な食生活を行う動機づけ, SOC, 問題のある食行動, Dutch Eating Behavior Questionnaire (DEBQ), ボディ・イメージ, ストレス反応, ソーシャル・サポート, 生きがい意識, 簡易型自記式食事歴法質問票 (Brief-type Self-administered Diet History Questionnaire: BDHQ)

地域住民を対象とした調査

調査の目的: 健康生成要因を強化・支援する食教育プログラムの標準化をめざした評価指標の作成, 健康生成資源を活用した生きいき食教育プログラム評価指標モデルの精緻化, 評価指標の有用性の検討

調査 1

調査対象: 532 名 (男性 275 名, 女性 257 名)

調査内容: 居住形態, 就労状況, 身長, 体重, MetS に関する知識, 保健指導への参加意思, 最終学歴, 経済状態, 「健康的な食事」および「健康のための運動」についての行動変容ステージ, A 12-Item Short-Form Health Survey (SF-12), SOC, ソーシャル・サポート, 生きがい意識, 休養について, ストレスについて, 健康な食生活を行う動機づけ, 健康のために運動を行う動機づけ, MetS 関連生理指標

調査 2

調査対象: 443 名 (男性 127 名, 女性 316 名)

調査内容:

居住形態, 就労状況, 身長, 体重, 最終学歴, 経済状態, 「健康的な食事」および「健康のための運動」についての行動変容ステージ, SF-12, SOC, ソーシャル・サポート, 生きがい意識, 地域で提供されている食育, 食習慣改善に対する態度, DEBQ, 健康づくりについて (自由記述), 休養について, 健康な食生活を行う動機づけ, 健康のために運動を行う動機づけ, BDHQ

調査 3

調査対象: 211 名 (男性 66 名, 女性 145 名)

調査内容: 居住形態, 就労状況, 身長, 体重, 経済状態, 起床時間と就寝時間, 朝型夜型, 「健康的な食事」および「健康のための運動」についての行動変容ステージ, SOC, ソーシャル・サポート, 生きがい意識, DEBQ, 休養について, ストレスについて, 健康な食生活を行う動機づけ, BDHQ

保健指導従事者を対象とした調査

調査の目的: 評価指標の有用性の検討

対象 保健指導従事者 67 名 (男性 1 名, 女性 66 名)

調査内容 自律支援アセスメント指標, 指導技術に対する必要性, 自信, 習得意思

(2) 実践調査

調査の目的: 評価指標の有用性の検討

中学生を対象とした授業の実施

対象者: 中学生 2 年生を対象として介入群 112 名 (男子 54 名 女子 58 名), 対照群 588 名 (男子 290 名 女子 298 名)

手続き: 栄養教諭に生きいき食教育プログラム評価指標モデルについて伝え, 受講者, 指導者とこれらを取り巻く環境の独自性を考慮した食教育プログラムを開発実施してもらった。食教育プログラムの内容は, 朝食および野菜の摂取についてであった。

介入前後の健康な食生活を行う動機づけの変化について検討するとともに, 形成的評価として, 朝食の栄養バランス, 野菜の摂取量を評価した。なお介入の前後に, 健康な食生活を行う動機づけの他に, (1) に示した調査内容と同様の調査も行った。

保健指導の専門職を対象とした研修の実施

対象者: 保健指導に従事する専門職 34 名 (保健師 16 名, 管理栄養士 14 名, 看護師 4 名)

手続き: T 町で保健指導に従事する保健師および管理栄養士を対象に研修に関する予備調査を行った。その後, S 県下で保健指導に従事する者に研修会の案内を行い, 参加の意思を示した者を対象に well-being 健康生成モデルに関連する心理社会的要因や行動理論に関する研修を二日間にわたって行った。研修の前後に, 自律支援アセスメント, 心理社会的要因および行動理論に対する理解度と活用の自信について尋ねた。

4. 研究成果

(1) well-being 健康生成モデルの構築

図 1 の健康生成資源を活用した生きいき食教育プログラム評価指標モデルに基づいて, 収集したデータを活用しモデルの精緻化を試みた。そうしたところ, 図 2 に示した well-being 健康生成モデルを採用することが, 最もデータのあてはまりが良いことが確認され, 図 2 に示したモデルを用いて研究を進めることとした。

つまり当初は, 複数の別々の研究から, 内的資源である SOC や外的資源であるソーシャル・

サポートによって食生活が改善され、その結果 MetS の改善が図られるとともに、日本発祥の well-being として捉えることができる生きがい意識(以下 well-being とする)や健康に関連する生活の質 (HR-QOL: Health related quality of life) が向上すると仮説を立てていた。しかし実際に、データを収集し共分散構造分析による多変量解析などによってデータを分析してみると、図 2 のようなモデルを構築することが適切であることが確認された。

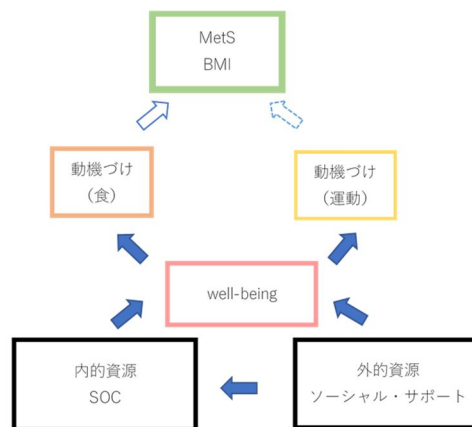


図 2 well-being 健康生成モデル

つまり SOC とソーシャル・サポートが well-being に影響し、well-being が健康な食生活を送る動機づけや健康のために運動を行う動機づけを媒介として BMI や MetS の状況に影響する。よってこのモデルに準じると、保健指導を行うにあたって体重のコントロールや食事や運動への介入以前に、対象者の well-being に注意を払う必要があることが見出された。

well-being に注意を払う必要があることが見出された。

要するに本研究の成果として、支援を行動変容につなげるためには、国民一人ひとりの well-being に注目する視点が必要であることが明らかになった。そしてそのために、ストレスレジリエンスといった個人の持つ内的資源を強化することを目ざすとともに、内的資源を強化しストレスに対処するときに動員される外的資源を整備することが有効であることも示唆された。

well-being 健康生成モデルは、心身の健康を保持増進することによって、well-being に至るとする従来のモデルとは異なっているものの、健康を支援する複数の専門家にインタビューを行ったところ、強い支持を得ることができた。しかし well-being、ストレスレジリエンス、ソーシャル・サポート、自己決定理論、行動変容ステージなど心理社会的要因や行動理論に関する情報が、健康支援の専門職の間に十分浸透していないことも同時に明らかとなった。そのため、実際に well-being 健康生成モデルに基づき、食育プログラムを作成し実施することへの難しさが報告された。今後は、こういった心理社会的要因や行動理論に関する情報を健康支援の専門職に伝えるための情報を収集しツールを開発する必要がある。実際、健康支援の専門職は、日常業務で多忙であり、勤務地を離れ研修を受け情報やスキルの向上をはかることが困難であることも報告されている。これらの阻害要因を考慮しながら、ツールを開発することが望まれる。また、well-being は、心の健康そのものでもある。心の健康に寄り添う対人支援が求められる以上、心理社会的要因や行動理論について、養成課程でのカリキュラムやリカレント教育も視野に入れながら体系的に学ぶ場の確保を検討する必要があると考える。

また well-being の向上は、健康領域にのみが関わる課題ではない、生活のあらゆる場面と関連する課題である。そのため健康支援専門職だけではなく、学校では教職員が一丸となり、また行政では部門を超えて協力して進められていくものである。つまり、健康の維持増進を図るためには、部門を超えた連携のづくりが望まれることが、研究を進める中で一つの課題として浮き彫りとなってきた。

(2) 健康生成要因を強化・支援する食教育プログラムの標準化をめざした評価指標の開発

健康生成要因を強化・支援する食教育プログラムの標準化をめざした評価指標として、健康な食生活を送る動機づけおよび自律支援アセスメント指標を開発した。

また食生活は運動や休養などの他の生活習慣とも関連が深い。そこで食生活と合わせて、運動や休養についても同時に検討する必要があったので、運動と睡眠に関する指標の開発も行った。

健康な食生活を送る動機づけ尺度の短縮版

自己決定理論に基づき、健康な食生活を行う動機づけ尺度の短縮版を開発した。この尺度は Pelletier et al. (2004) によって開発された食行動を制御する動機づけを測定する尺度をもとに作成したものである。Pelletier et al. (2004) の開発した尺度では、食行動を制御する動機づけに関する尺度であるため、ボディ・イメージに関する項目が混在していた。わが国においては、若年女性の痩せ願望に見られるように、ボディ・イメージが関与する食行動は必ずしも健康な食行動とは一致しない。本研究では、健康のための食行動に質問を焦点化することにより、ボディ・イメージによる項目は排除され、MetS の状況など生理指標を予測することができる評価指標を作成することができ、この点は特筆すべき点である。

調査では、影響要因などを見出すために、SOC、ソーシャル・サポート、生きがい意識、首尾一貫感覚、動機づけなど複数の尺度を利用した。これらの尺度の中で動機づけ尺度は、質問項目数が 29 項目と最も多い。中学生から高齢者までより幅広い年齢の対象者に回答をしてもらうためには、項目数を減らし少しでも回答の負担を減らす必要がある。そこで、主成分分析を行い短縮版の尺度の開発を行った。

開発した尺度は、ハンガリー語およびノルウェー語にも翻訳され、国際比較調査も行っている。

こうして、国際ネットワークを構築し、食行動に関する研究の展開をさらに広げている。

自律支援アセスメント指標

Williams ら（1998）が開発した Health Care Climate Questionnaire を参考に、保健指導の専門職が自分自身の指導が自律性を育む保健指導になっているかを評価することが出来る指標を開発した。

健康のために運動を行う動機づけ尺度の短縮版

自己決定理論に基づき、健康のために運動を行う動機づけ尺度の短縮版を開発した。

Composite Scale of Morningness(CSM)の日本語版

朝型夜型は、特に朝食の摂取状況に関連している。朝食の欠食は、わが国の健康政策でもその減少が目ざされている。そこでハンガリーの朝型夜型研究の専門家とともに起床時間や就寝時間との関連性も見ながら CSM の日本語版の開発を行った。CSM は、国際的に使用されている尺度で、複数の言語での開発が行われている。国際化が進み、健康領域においても国際的に共有せざるを得ない課題が生じている。このような状況の中、CSM の日本語版の開発に至ることが出来たことは、注目すべき研究成果の一つである。本研究では、朝型夜型は、朝食の摂取状況とも関連していることが確認された。また、現在は朝食の欠食の有無のみが目ざされているが、欠食の有無だけでなく、朝食の内容も主観的健康に関連している可能性が示された。今後は一歩踏み込んで、食事の内容を簡単に評価できる尺度の開発が必要である。

（3）評価指標の有用性の検討

評価指標の有用性を検討するために、中学生を対象に介入研究を行ったところ、一定の有効性を確認することができた。また、指標の有用性を確認するために食事調査や血液検査値との関連性についても検討することができた。自律支援アセスメントの有効性については、保健師や管理栄養士などの専門職を対象に研修を行い検討した。

生理指標との関連性

健康な食生活を行う動機づけと生理指標の結果から、大学生以上については、自律性を促すことが、メタボリックシンドローム関連指標などの生理指標の改善につながることを示され、極めて実効性の高い指標を開発することが出来た。

中学生を対象とした授業の実施

健康な食生活を送る動機づけについては、最終的に有意な変化は見られなかった。形成的評価として行った朝食の栄養バランスは改善されていった。しかし、野菜の摂取量については、緑黄色野菜の摂取量は減少、その他の野菜は増加しており、合計の摂取量には有意な変化は見られなかった。

食行動は、他の生活習慣との関連も深く、子ども食行動に変容を促すためには、食生活だけではなく、他の生活要因にも注目する必要があると考えられる。例えば、今回の調査からも朝食の摂取状況は、朝型夜型によっても影響を受けることが確認された。

また対象とした中学生では、取り入れ的調整が野菜の摂取とポジティブな関連があった。この点は、大学生以上とは異なる点である。つまり中学生以上では、健康な食生活を送れないことに恥ずかしさや罪悪感を感じることで、健康な食行動を促している可能性があり、周囲からの外的な働きかけが必要とされている可能性がある。

保健指導の専門職を対象とした研修の実施

保健指導の専門職を対象とした研修を実施したところ、well-being 健康生成モデルに関連する心理社会的要因や行動理論に関する理解度と活用の自信について、すべての項目で有意に効果がみられた。しかし、自律支援アセスメントの指標には変化は見られなかった。その後も H 県において、研修を継続的に行っているが、心理社会的要因や行動理論について、よく理解できたものの、具体的にどのように活用するのかがイメージできなどの意見があり、行政とも連携し、より実践場面に即した研修プログラムを検討中である。

以上のことから生理指標との関連性が見出され評価指標については、特に高い有用性が確認された。今後は、実用化に向けて指標の改良を積み重ねるとともに、健康支援の専門職が指標を活用できるように啓発方法を検討する必要である。

（4）そのほかの研究成果

活用が推奨されている行動変容ステージと心理社会的要因との関連を検討し、ステージにおける心理社会的特徴について検討し、先述した結果も含め研修資料等を作成した。

SOC を高める要因として、当初、外的資源であるソーシャル・サポートを想定し、検証を進めてきた。その結果、ソーシャル・サポートは SOC に有意に影響していることが繰り返し確認された。本研究では、昨今食品の摂取により心理的な健康の増進が図られるといった研究が進んでいることに着目し、着想の転換を行い食品の摂取と SOC との関連についても分析した。その結果、乳製品や納豆の摂取が SOC と関連していることを見出した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 4件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Kato Yoshiko, Urban Robert, Saito Seiichi, Yoshida Keigo, Kurokawa Michinori, Rigo Adrien	4. 巻 5
2. 論文標題 Psychometric properties of a Japanese version of Composite Scale of Morningness	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Heliyon	6. 最初と最後の頁 e01092 ~ e01092
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1016/j.heliyon.2018.e01092	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 小島亜未、加藤佳子	4. 巻 37
2. 論文標題 健康診査受診者の生きがいと首尾一貫感覚 (Sense of coherence: SOC) およびソーシャル・サポートとの関係	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本看護学会誌	6. 最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.5630/jans.37.18	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hu Chenghong, Kojima Ami, Athenstaedt Urusla, Kato Yoshiko	4. 巻 5
2. 論文標題 Psychometric Validation of Exercise Motivation for Health Scale (EMHS)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Open Journal of Social Sciences	6. 最初と最後の頁 274 ~ 287
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4236/jss.2017.510024	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 小島亜未、加藤佳子	4. 巻 37
2. 論文標題 健康診査受診者の生きがいと首尾一貫感覚 (sense of coherence: SOC) およびソーシャル・サポートとの関係	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本看護科学学会誌	6. 最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Elfriede Greimel Yoshiko Kato ; Maria Muller-Gartner ; Beate Salchinger ; Roswith Roth ; Wolfgang Freidl	4. 巻 -
2. 論文標題 Internal and external resources as determinants of health and quality of life	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1371/journal.pone.0153232	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 加藤佳子, 一尾友貴, 永野和美, 小島亜未, 西敦子	4. 巻 9
2. 論文標題 大学生の健康な食生活を送る自律的動機づけと児童期の学校および家庭での食環境との関連	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要	6. 最初と最後の頁 71-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nora Roman; Adrien Rigo; Yoshiko Kato; Zsolt Horvath; Robert Urban	4. 巻 -
2. 論文標題 Cross-cultural comparison of the motivations for healthy eating: investigating the validity and invariance of the motivation for healthy eating scale	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Psychology & Health	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1080/08870446.2020.1773462	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計29件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 加藤 佳子 ; 小島 亜未 ; 黒川 通典
2. 発表標題 地域住民の心の健康と食品・栄養摂取状況との関連 : 田尻町循環器予防プロジェクト
3. 学会等名 第77回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黒川 通典 ; 小島 亜未 ; 加藤 佳子
2. 発表標題 尿中塩分量と生理指標との関連 : 田尻町循環器疾患予防プロジェクト
3. 学会等名 第77回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤 佳子 ; 永野 和美 ; 王 一然 ; 胡 承
2. 発表標題 中等教育学校生の心の健康と食品摂取状況の関連
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Adrien Rigo; Yoshiko Kato; Robert Urban; Nora Roman
2. 発表標題 Ikigai and Subjective Well-being in University Students from Japan and Hungary
3. 学会等名 9th European Conference on Positive Psychology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshiko Kato; Robert Urban; Chenghong Hu; yiran Wang; Adrien Rigo
2. 発表標題 The relationship among SOC, Social Support, Well-being, and Motivation for Autonomous Regulation of Eating Behavior in Hungarian and Japanese Students
3. 学会等名 77th Annual Conference International Council of Psychologists (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 永野 和美 ; 小島 亜未 ; 加藤 佳子
2. 発表標題 中高生の健康な食生活に関する行動変容ステージ別の食行動の特徴
3. 学会等名 日本学校保健学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤 佳子 ; 永野 和美 ; 小島 亜未
2. 発表標題 日本語版Dutch eating behavior questionnaire for children (DEBQ-C)の妥当性と信頼性の検証
3. 学会等名 日本学校保健学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kato Yoshiko ; Hu Chenghong ; Kojima Ami
2. 発表標題 Psychometric Properties of a Short Version of the Healthy Eating Motivation Scale
3. 学会等名 International Nursing Research Conference 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kojima Ami ; Kato Yoshiko
2. 発表標題 Relationship between Ikigai (well-being), Sense of coherence, and the social support in obese and non-obese adults
3. 学会等名 International Nursing Research Conference 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 黒川 通典 ; 小島 亜未 ; 加藤 佳子
2. 発表標題 Sense of Coherenceと健康な食生活を送る動機づけとの関連
3. 学会等名 日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤 佳子 ; 小島 亜未 ; 黒川 通典
2. 発表標題 クロノタイプと健康な食生活を送る動機づけおよび社会心理的要因との関連
3. 学会等名 日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 濱崎 朋子 ; 三浦 公志郎 ; 加藤 佳子
2. 発表標題 女子大学生の体型と身体活動量、栄養摂取および健康な食生活を送る動機づけとの関連
3. 学会等名 日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤 佳子 ; 王 一然 ; 田北 祐幹 ; 小島亜未
2. 発表標題 食習慣改善に対する態度と社会心理的要因との関連 生きがい意識、SOC、ソーシャル・サポートに注目して
3. 学会等名 日本健康心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤 佳子 ; 吉田 圭吾 ; 王 一然 ; 齊藤誠一
2. 発表標題 日本語版CSM(Composite Scale of Morningness)の開発
3. 学会等名 第29回大会 日本健康心理学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小島 亜未 ; 加藤 佳子 ; 佐藤 眞一
2. 発表標題 食習慣・運動習慣の行動変容ステージと動機づけおよびソーシャル・サポートとの関係
3. 学会等名 第75回 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 加藤 佳子 ; 小島 亜未 ; 佐藤 眞一
2. 発表標題 食習慣改善に対する態度と自律的な動機づけおよび社会心理的要因との関連
3. 学会等名 第75回 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Eri Yoshida ; Moe Nakamura ; Daisuke Yamanoi ; Chihiro Ishikura ; Yukie Furuya ; Naoya Shigeta ; Yu Takita ; Ami Kojima ; Yoshiko Kato
2. 発表標題 Austrian and Japanese student's well-being and related factors
3. 学会等名 74th Annual Conference of ICP, Inc. (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Kato Yoshiko ; Greimel Elfriede ; Gartner Maria Muller ; Freidi Wolfgang ; Roswith Roth
2. 発表標題 The relationship between Sense of Coherence and restrained, emotional, and external eating in Japanese and Austrian university students
3. 学会等名 The 31st international congress of psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Moe Nakamura ; Eri Yoshida ; Daisuke Yamanoi ; Chihiro Ishikura ; Yukie Furuya ; Naoya Shigeta ; Yu Takita ; Ami Kojima ; Yoshiko Kato
2. 発表標題 The Relationship between subjective well-being, and relationship with family and living environment in Austrian and Japanese
3. 学会等名 74th Annual Conference of ICP, Inc. (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Ami Kojima ; Chenghong Hu ; Yoshiko Kato
2. 発表標題 The Relationship between the action transformation stage, IKIGAI and Sense of Coherence
3. 学会等名 74th Annual Conference of ICP, Inc. (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yoshiko Kato ; Ami Kojima ; Chenghong Hu
2. 発表標題 The Relationship between the Sense of Coherence and motivation for the autonomous regulation of eating behaviors
3. 学会等名 74th Annual Conference of ICP, Inc. (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 加藤佳子, 小島亜未
2. 発表標題 健康な食生活および運動に関する動機づけとメタボリックシンドローム関連指標との関係
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 小島亜未, 加藤佳子
2. 発表標題 食習慣および運動習慣における行動変容ステージとMetS関連指標との関連
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 加藤佳子, 小島亜未, 永野和美
2. 発表標題 児童期の学校および家庭での食習慣と健康な食生活を送る動機づけとの関係 - 大学生を対象とした回顧調査 -
3. 学会等名 日本学校保健学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 永野和美, 小島亜未, 加藤佳子
2. 発表標題 児童期における家庭と学校での食習慣の男女差の検討 - 大学生を対象とした回顧調査 -
3. 学会等名 日本学校保健学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 小島亜未, 永野和美, 加藤佳子
2. 発表標題 児童期の家庭と学校での食習慣の因子構造 - 大学生を対象とした回顧調査 -
3. 学会等名 日本学校保健学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 加藤佳子, 小島亜未, 藤谷倫子
2. 発表標題 Relationship between IKIGAI and Healthy Eating Habits
3. 学会等名 Annual Conference of ICP, Inc. (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 小島亜未, 加藤佳子
2. 発表標題 The Relationship between IKIGAI, Sense of Coherence, and Social Support
3. 学会等名 Annual Conference of ICP, Inc. (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Yoshiko Kato, Elfriede Greimel, Maria Muller-Gartner, Beate Salchinger, Wolfgang Freidl, Rosiwith Roth
2. 発表標題 The relationship between sense of coherence and restrained, emotional, and external eating in Japanese and Austrian university students
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/4946>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	小島 亜未 (Kojima Ami) (00738362)	姫路大学・看護学部・准教授 (34534)	
研究 分担者	黒川 通典 (Kurokawa Michinori) (30582324)	摂南大学・農学部・教授 (34428)	
研究 分担者	西 敦子 (Nishi Atsuko) (90526914)	山口大学・教育学部・教授 (15501)	